

平安京右京七条一坊二町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京七条一坊二町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび建物建築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

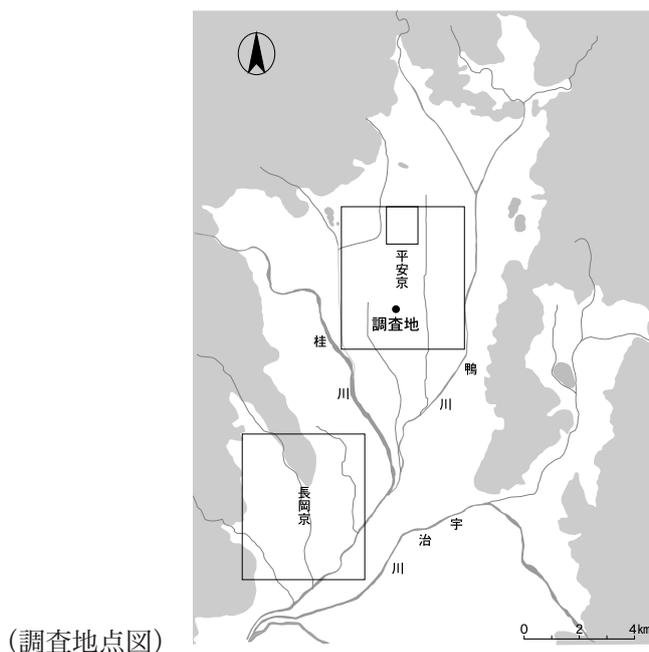
平成 19 年 10 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安京右京七条三坊二町・西坊城小路跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市下京区朱雀分木町地内 |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼 |
| 4 調査期間 | 2007年7月2日～2007年8月13日 |
| 5 調査面積 | 278 m ² |
| 6 調査担当者 | 内田好昭・加納敬二 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「島原」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 通し番号を付し、写真の番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 遺物復元 | 村上勉・出水みゆき |
| 16 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 17 本書作成 | 内田好昭・加納敬二 |
| 18 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・櫻井みどり・山口 眞 |



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 既往の調査	2
3. 遺 構	5
(1) 基本層序と遺構検出面	5
(2) 遺構の概要	5
(3) 個別遺構の解説	9
4. 遺 物	12
(1) 遺物の概要	12
(2) 土器類	13
(3) 温石	15
5. ま と め	16

図 版 目 次

図版1 遺構	1 試掘調査区全景（北西から）
	2 北区全景（南東から）
図版2 遺構	1 南区全景（東から）
	2 溝2検出状況（北から）
図版3 遺物	1 平安時代前・中期の土師器・須恵器
	2 溝1・溝2出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査前全景（北西から）	1
図2	試掘調査旧建物基礎（南東から）	1
図3	調査位置図（1：2,500）	3
図4	調査区配置図（1：400）	4
図5	北区北壁断面図（1：50）	6
図6	南区南壁断面図（1：50）	7
図7	北区・南区平面図（1：150）	8
図8	溝2実測図（1：40）	9
図9	柱穴6実測図（1：20）	10
図10	柱穴7検出状況（北から）	10
図11	土坑4-1・4-2実測図（1：40）	10
図12	土坑5実測図（1：40）	11
図13	土坑9・10検出状況（東から）	11
図14	平安時代前・中期の土師器実測図（1：4）	13
図15	平安時代前・中期の須恵器実測図（1：4）	13
図16	溝1・溝2出土平安時代後期の土器類実測図（1：4）	14
図17	溝1出土温石実測図（1：2）	15

表 目 次

表1	遺構概要表	12
表2	遺物概要表	14

平安京右京七条一坊二町

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

この調査は、建物建築工事に先立って実施したものである。調査地は京都市中央卸売市場内にあり、敷地面積は約 1,500 m²ある。現況は駐車場であるが、それ以前に大型の建物が存在していたことが明らかであったため、遺構の残存状況を確認する目的で、まず確認調査を行うことにした。確認調査は2007年6月13日より開始した。確認調査区は、幅約2m、長さ約48mの南北調査区と、幅約2m、長さ約26mの東西調査区を十字型に設置した。確認調査の結果、敷地中央部に地下施設を伴う旧建物の基礎を現地表下160～190cmで検出した。コンクリートの厚さなどを勘案すると、旧建物による掘削は現地表下約250cmに及ぶものと考えられ、この部分では遺構が残存しないことが判明した。同時に、敷地北端から南へ約2m、敷地南端から北へ約10mの範囲で、遺構が残存する部分を確認した。確認調査は6月21日に終了した。

確認調査の結果を受けて、京都市文化財保護課は遺構の残存部分について発掘調査を行うように指導した。このため、発掘調査を行うことになった。

(2) 調査の経過

発掘調査は、2007年7月2日に開始した。北側の遺構残存部分には、幅約2m、長さ約26mの調査区「北区」を設けた。南側の遺構残存部分には、幅約8.5m、長さ約26mの調査区「南区」を設けた。両区は、遺構の残存が見込まれる範囲に設定されたが、確認調査で確認したものは別の旧建物基礎によって遺構面の大半は削平や破壊を受けていた。調査の結果、西坊城小路東側溝を検出したが、これ以外に目立った遺構を検出することができなかった。8月13日にすべての現場作業を終了した。なお、7月23日に京都市文化財保護課の現地指導を受けた。



図1 調査前全景（北西から）



図2 試掘調査旧建物基礎（南東から）

2. 位置と環境

(1) 位置と環境 (図3・4)

調査地は、千本通の西、花屋町通の南側の一角で、敷地面積は約1,500㎡ある。敷地内の現況は平坦であるが、周囲の道路等の高低差などから旧地形を判断すると、敷地北東隅が最も高く、敷地南西隅が最も低い。両地点の高低差は約30cmあり、北東から南西にかけて緩やかに傾斜する。鴨川右岸に広がる扇状地の西端近くにあたる。

平安京条坊では、敷地東半は右京七条一坊二町、敷地西半は西坊城小路となる。敷地のすぐ北には右京七条一坊二町の北側の道路である左女牛小路が想定される。また、右京七条一坊二町は朱雀大路に隣接する。右京七条一坊二町に存在した施設について記録した文献記録は存在せず、かつて当地にどのような施設が存在したか不明である。右京七条一坊二町の南側の街路ブロックである右京七条一坊三町および同四町には、外国使節の迎賓施設である西鴻臚館が存在した。

当地は、江戸時代の古絵図には耕地として描かれている。平安時代以降江戸時代に至る間のあたる時期に耕地化したのである。また、当地は16世紀末に御土居の内側に取り込まれたが、江戸時代を通じて耕地が継続し、市街地に取り込まれることはなかった。江戸時代には京郊農村の一つである朱雀村の耕地であった。明治22年(1889)の市制町村制の施行によって、朱雀村が大内村に合併されたのちも耕地の状態が続き、昭和2年(1927)の京都中央卸売場の開設まで継続した¹⁾。

(2) 既往の調査

昭和59年(1984)度に右京七条一坊二町の南東隅部分が発掘調査されている。この調査では、朱雀大路の西側溝や七条坊門小路北側溝などが検出されているが、町内に建物跡など目立った遺構は検出されていない²⁾。また、昭和61年(1986)度には、右京七条二町北東隅に北接する地点で発掘調査が行われ、左女牛小路の南北両側溝が検出されている³⁾。すなわち、現在までに右京七条一坊二町内の景観や施設などを知り得る資料は得られていない。

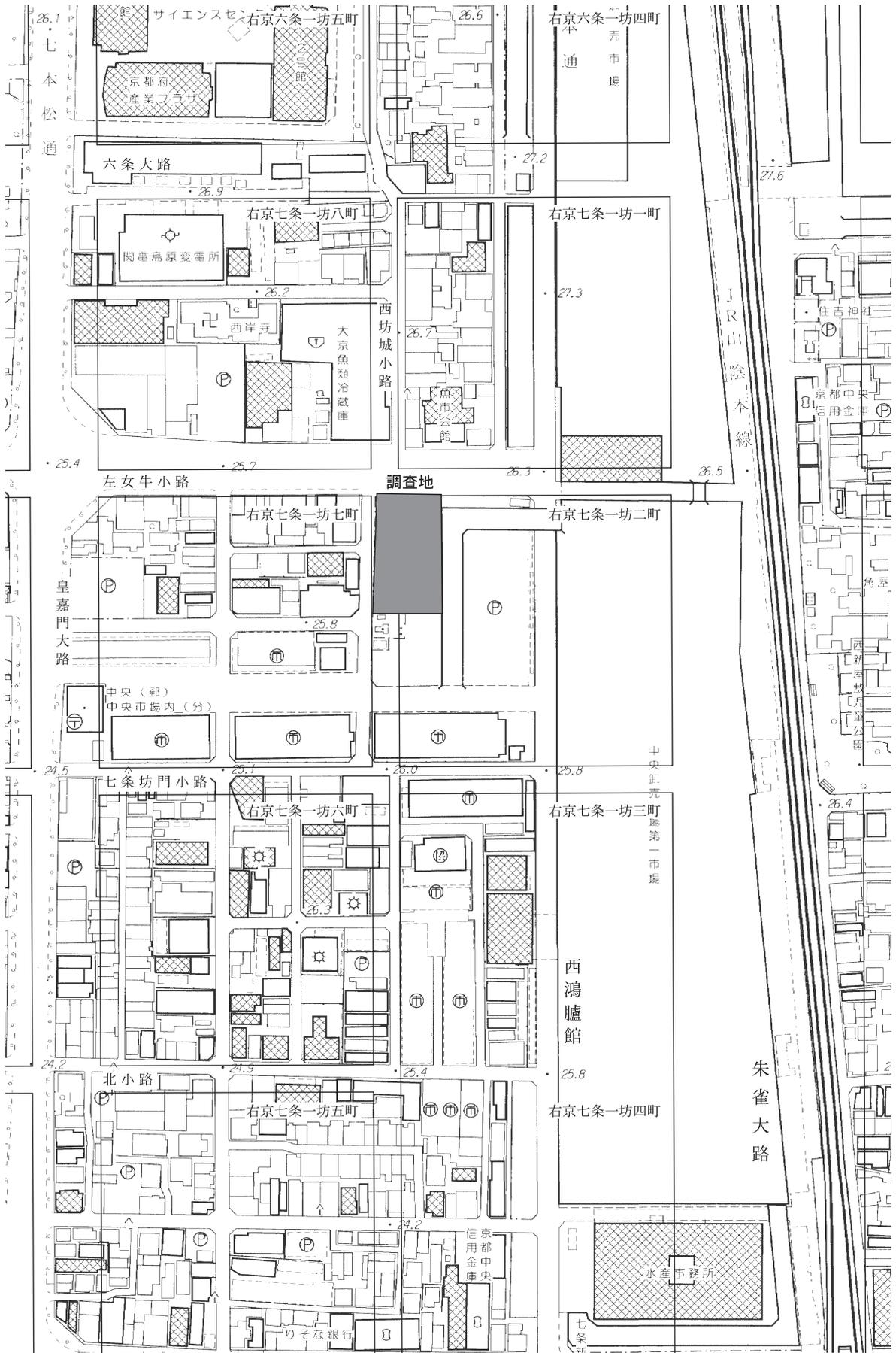


図3 調査位置図 (1 : 2,500)

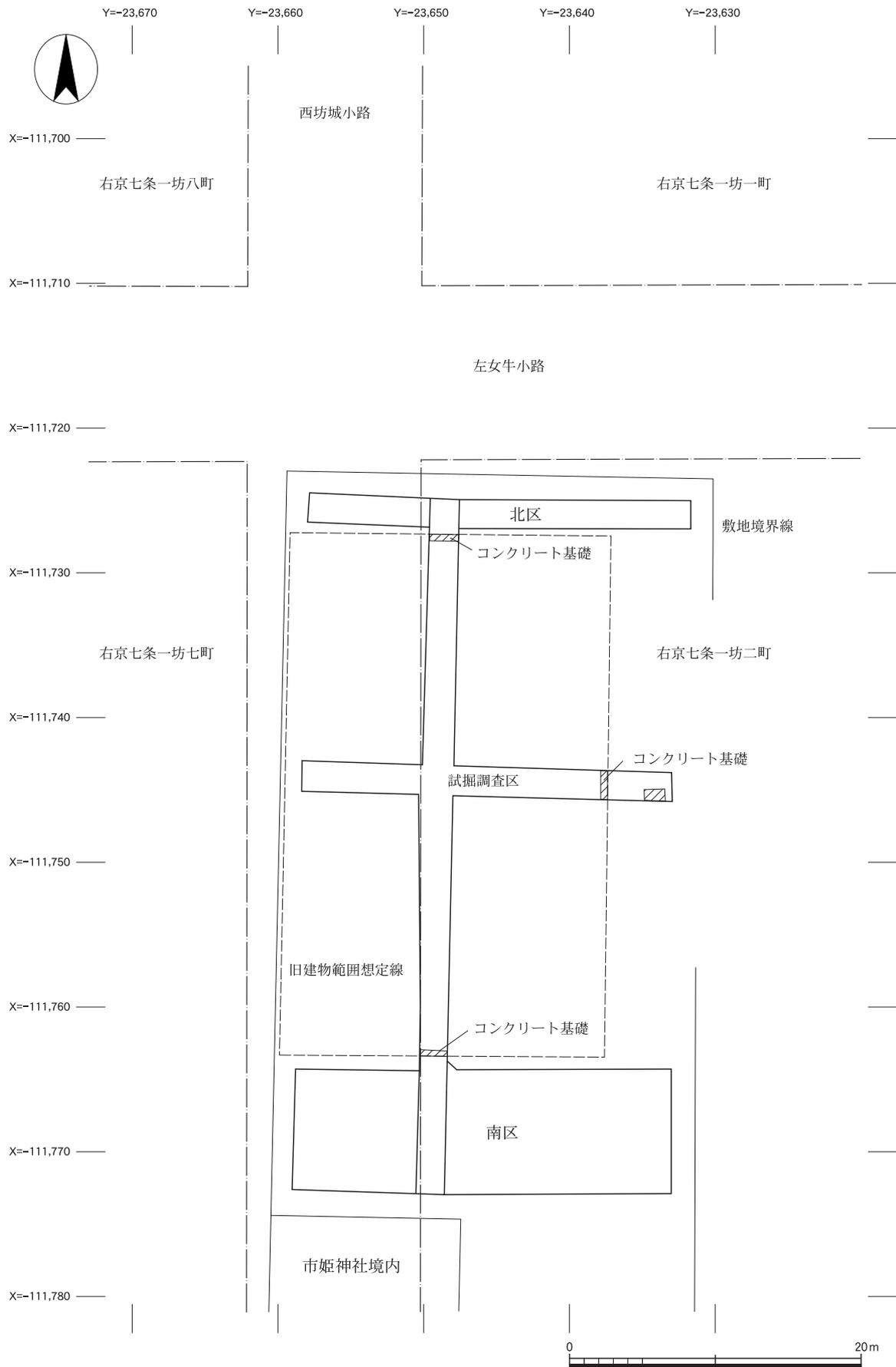


図4 調査区配置図 (1 : 400)

3. 遺 構

(1) 基本層序と遺構検出面 (図5・6)

北区と南区は、ほぼ同じ基本層序である。また、北区北壁断面図(図5)と南区南壁断面図(図6)の地層番号は共通する。

層厚約5cmのアスファルト層、層厚20～30cmの碎石層の下に現代盛土・攪乱層がある。現代盛土・攪乱層は、薄い部分では層厚約30cm程度に止まるが、厚い部分では層厚2m以上に及び、下層の遺構面を大きく削り込み破壊している。現代盛土・攪乱層が薄い部分では、直下に黒褐色シルト層が残存している。この地層は19世紀代の国産陶磁器類を包含し、現代盛土層中に部分的に残存する京都市中央卸売市場建設時のものと思われる客土層が整合的に覆うことから、江戸時代から近代にかけての耕作土であると考えられる。黒褐色シルト層の下は北区東端では黒褐色シルト層、北区中央部ではにぶい黄褐色シルト層、南区では暗褐色シルト層である。いずれも平安時代以降の遺構面を形成する地層で、これらの地層から遺物は出土していない。平面的な調査は、これらの地層上面の一面のみで行った。いずれの遺構面形成層も褐鉄の沈殿が著しいが、とりわけ南区の遺構面を形成する暗褐色シルト層部分では土壌化が著しく遺構の見極めが困難であったため、土壌化部分を掘り下げて下層の黄褐色シルト層上面で遺構を検出した。ただし、暗褐色シルト層と黄褐色シルト層は堆積層としては一連である。

遺構面形成層の相互の関係を述べておく。北区東端で遺構面を形成する黒褐色シルト層を削り込んで北区中央部から西端まで自然流路の堆積が観察できる。この自然流路はおおむね粒径が大きい堆積物で構成されるが、これらの上部を覆うのが前述のにぶい黄褐色シルト層である。南区の遺構面を構成する暗褐色シルト層がどちらの地層に相当するか不明であるが、暗褐色シルト層の下地層は粒径の大きい流水性の堆積になっているので、どちらかというのにぶい黄褐色シルト層に対応する地層である可能性が高い。

(2) 遺構の概要 (図7、表1)

両区とも遺構面は現代の攪乱によって著しい破壊を受けていて、遺構の残存状況は悪い。しかし、遺構面残存部分にいくつかの遺構を検出することができた。検出遺構の総数は11基である。平安時代の遺構は溝1と溝2のみである。両溝は一連の遺構であり、西坊城小路東側溝と考えるものである。しかし、西坊城小路推定域には全体的に現代の削平が及んでおり、路面などの遺構を検出していない。柱穴6は平安時代に遡る可能性がある遺構であるが、時期は不明である。柱穴7は中世以降の遺構と考えるが、これも時期不明である。土坑4-1、土坑4-2、土坑5、土坑8、土坑9は、いずれも安土桃山時代から江戸時代にかけての遺構であり、埋土の堆積状況などから土取穴と考えるものである。一連の遺構の可能性のある土坑10と土坑11も時期は不明であるが土取穴の可能性のあるものである。

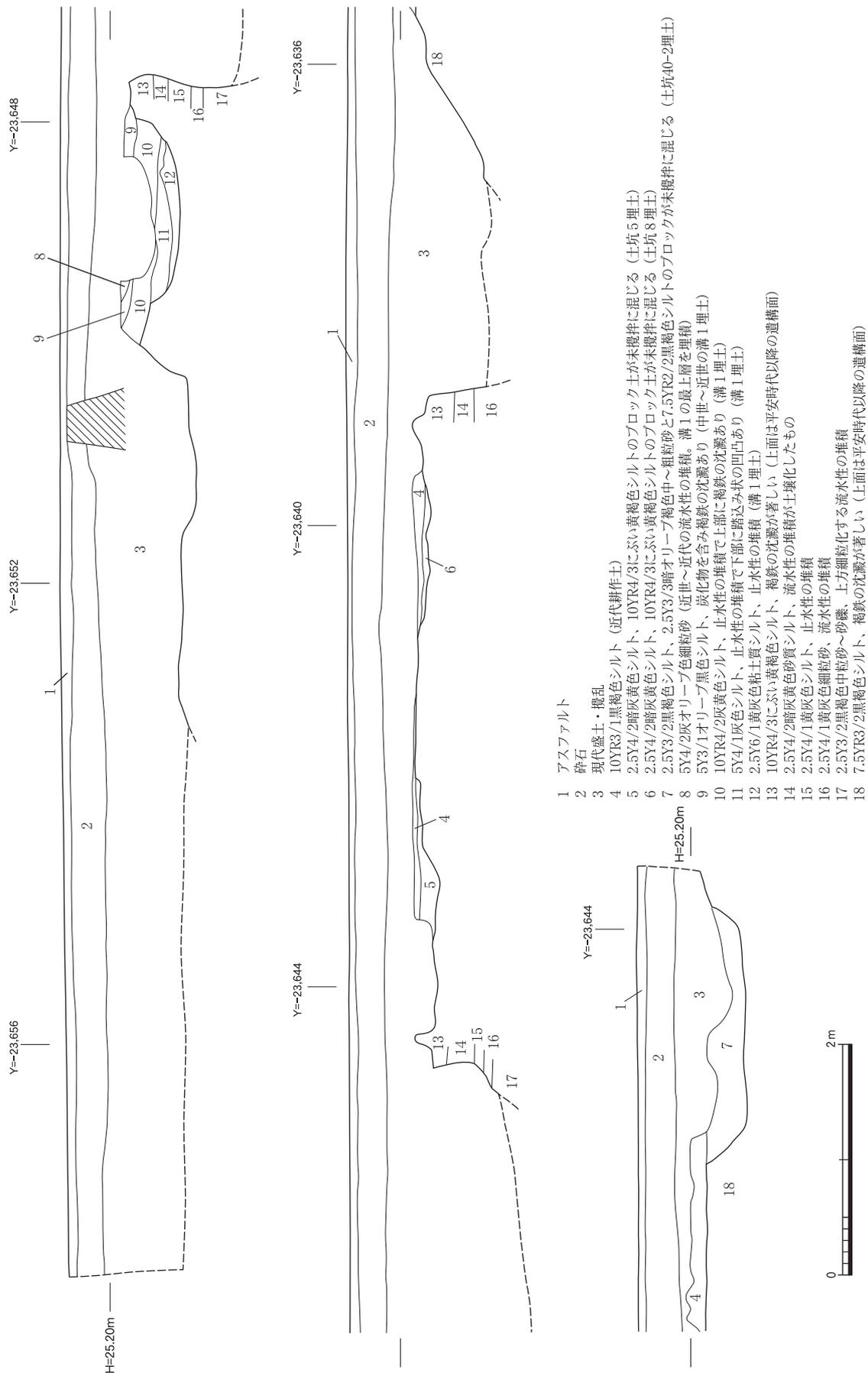


図5 北区北壁断面図 (1:50)

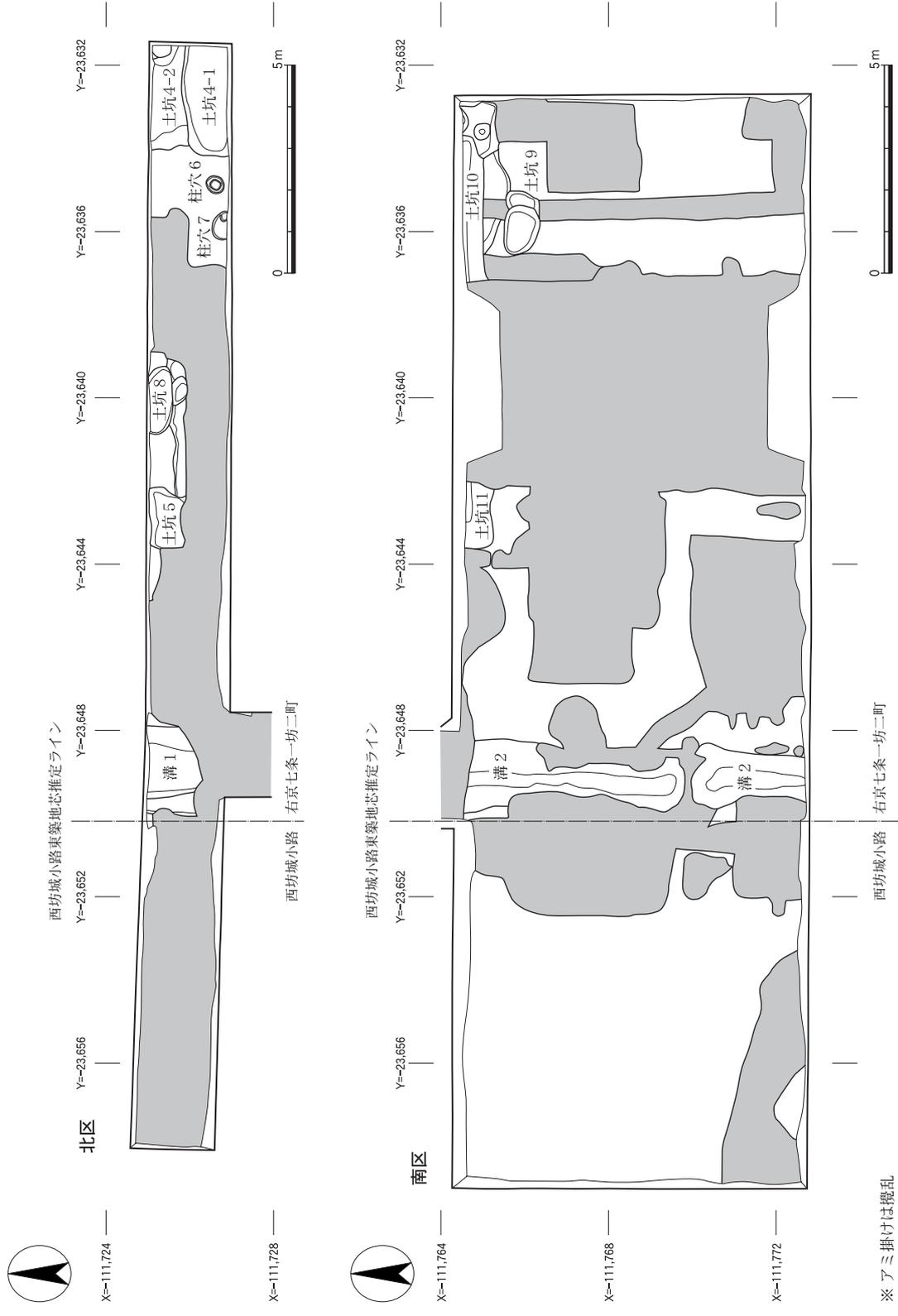


図7 北区・南区平面図 (1 : 150)

(3) 個別遺構の解説

溝1・溝2（図8、図版2）溝1は北区で検出した。幅約2.0m、深さ約0.4mあり、南北1.2mにわたって検出した。北は調査区外に延び、南は攪乱で壊されている。溝2は南区で検出した。幅約1.7m、深さ約0.5mあり、南北約8.2mにわたって検出した。南は調査区以外に延び、北は攪乱で壊されている。両遺構は平面的な位置関係、規模、堆積状況、出土遺物の時期などが共通し、一連の溝と考えることができる。両溝とも埋土は3層に区分できる。3層とも粘質のシルト層中に葉理が観察でき、滞水状態か極めて緩やかな水流によって埋没したと考える。中層の下面に踏み込み状の凹凸が観察できる点でも共通する。埋土からは9世紀から10世紀にかけての土器瓦類の小片が多く出土するが、最下層で京都IV期中段階から新段階にかけてのほぼ完形の土師器皿が出土しており、主として11世紀後半以降に埋没していることがわかる⁴⁾。しかし、溝1では、これらの堆積層の上位に江戸時代の遺物を含むオリーブ黒色シルト層が垂れ込み、さらにその上位を流水性の灰オリーブ色細粒砂が覆う（図5）。このことから、江戸時代においても溝の上部が窪みとなって地表に残存していたと考える。なお、溝2では、溝底部の一部を堤状に掘り残して盛り上げ、溝が切断されているかのように見える箇所を確認している。このような形状を呈することの意味は明らかにできないが、あるいは溝掘削の際の作業単位の可能性も考えられよう。両溝は西坊城小路東築地芯推定ラインよりやや東側に検出しており、復元モデルとの位置関係のみから解釈すれば、西坊城小路東築地の内溝とすべきであるが、両溝以外に南北溝は検出しておらず、西坊城小路東側溝と考えるのが妥当であろう。

柱穴6（図9）北区で検出した。直径約0.4mの円形掘形の中央に、一辺約0.2mの隅丸正方形の柱痕跡が残る。深さは約0.25mある。埋土から、土師器、須恵器、黒色土器、瓦などの小片が出土している。9

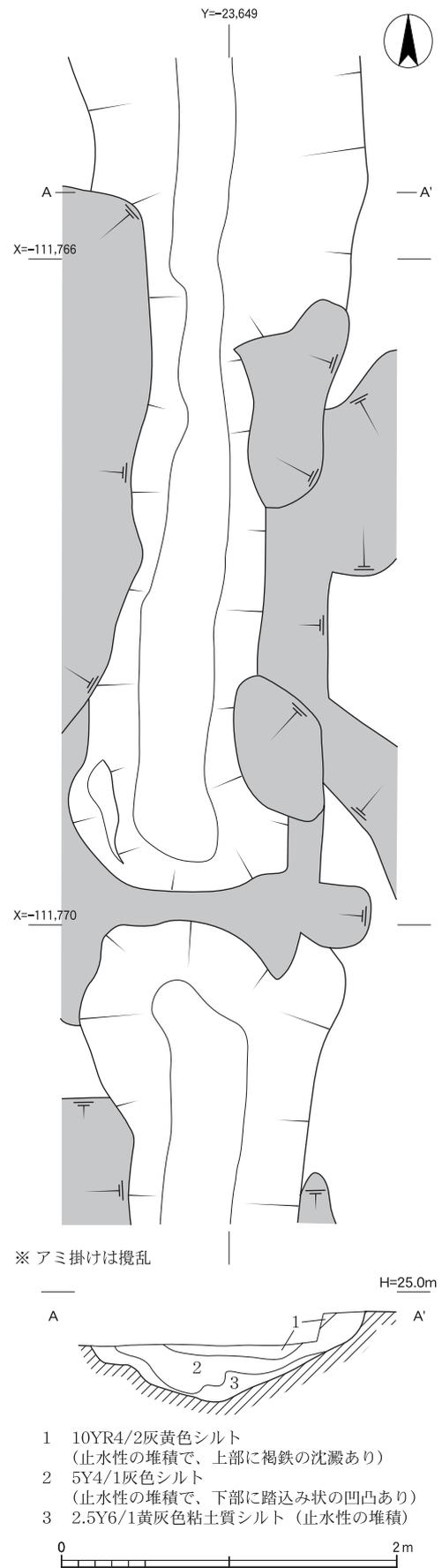


図8 溝2実測図 (1:40)

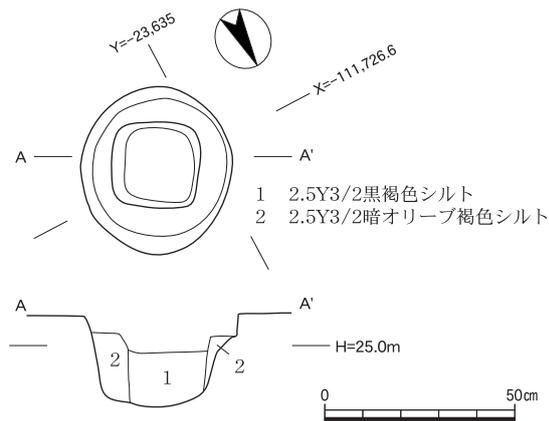


図9 柱穴6実測図(1:20)

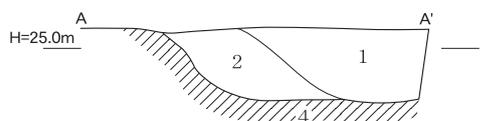


図10 柱穴7検出状況(北から)

世紀から10世紀以降の遺構と考える。

柱穴7(図10)北区で検出した。直径0.2mの円形の掘形底に平瓦片を置き礎板とするものである。深さは約0.1mある。埋土から、土師器、須恵器、黒色土器、焼締陶器などの小片が出土しているが、出土遺物から掘削時期を判別できない。柱穴の形状から13世紀以降の遺構と考える。

土坑4-1・土坑4-2(図11)北区の東端で検出した。当初、土坑4と命名して全体を掘り下げたが、検出面から0.15m掘り進めたところで南北に二つの遺構が重なり合う状況を確認した。



- 1 2.5Y4/1黄灰色シルト(2.5Y4/2暗灰黄色シルトブロック混)
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色シルト(2.5Y3/2黒褐色極粗砂ブロック混)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
- 4 7.5YR3/2黒褐色シルト

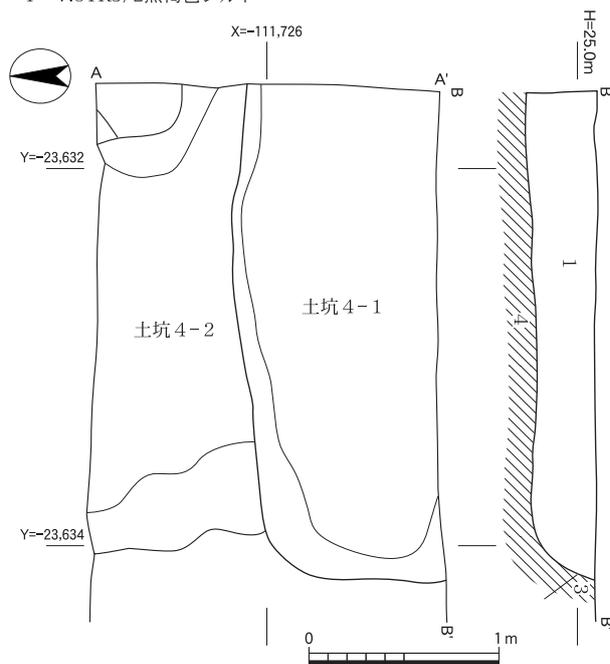


図11 土坑4-1・4-2実測図(1:40)

南側を土坑4-1、北側を土坑4-2とし、これ以下を掘り分けた。土坑4-2が埋没した後に土坑4-1が掘られている。土坑4-1は、南北長1.1m以上、東西長2.6m以上あり、南側と東側は調査区外に広がる。土坑4-2は、南北長0.9m以上、東西長2.4m以上あり、北側と東側は調査区外に広がる。深さは両土坑とも約0.4mある。埋土は、両土坑とも遺構面を形成する地層のブロック状の塊が一度に埋め戻された状況を示している。両土坑の深さと西端が一致していること、埋土の状況が似ることから、ほぼ同時期に掘削された遺構と考える。両土坑とも埋土から、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、中国製磁器、施釉陶器、瓦などの小片が多量に出土している。9世紀から10世紀にかけての土師器、須恵器が主体を占めるが、11世紀からや14

世紀にかけての土師器皿も少量出土している。瓦器碗は12世紀後半から13世紀前半のもの、中国製磁器は11世紀から12世紀にかけての白磁碗片と15世紀ごろの龍泉窯系の青磁碗の小片である。また、土坑4-2から1点のみ出土している施釉陶器は志野釉の瀬戸美濃系施釉陶器の皿で、明らかに16世紀末から17世紀初頭になるものである。以上より、両遺構は16世紀末から17世紀初頭の遺構と考える。これらの鎌倉時代以降の遺物は、遺構の時期を考える上で重要であるが、きわめて小片であるため実測図を掲載していない。遺構面を形成する地層は良質のシルト層であること、二つの土坑がほぼ同じ時期に同様の規模で掘削されていることなどから、両土坑を土取穴と考える。また、埋土に耕作土を含まないことから、当地が耕地化する以前に掘削された遺構であることがわかる。

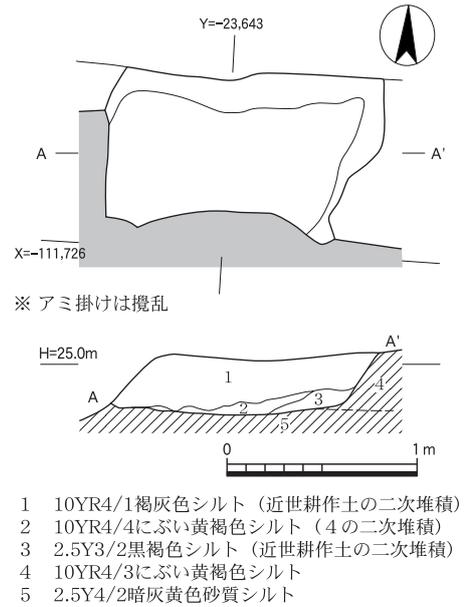


図12 土坑5実測図(1:40)

土坑5(図12)北区で検出した。南北長0.9m以上、東西長約1.5m、深さ約0.3mある。北側の肩口は、ほぼ北区の北壁に一致し、南側の全体と西側の一部が攪乱によって破壊されている。埋土の下部には遺構面を形成するにぶい黄褐色シルト層が二次的に落ち込んでいるが、大半は江戸時代の耕作土で一度に埋め戻されている。埋土からは平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、中国製白磁、瓦などの小片が出土しているが、1点のみ肥前系施釉陶器の折縁皿の口縁端部の細片が出土しており、17世紀前半以降の遺構であることが明らかである。遺構面形成層がシルトから砂質シルトに変わる深さで掘削を止めていることから、この遺構も土取穴と考える。

土坑8 北区で検出した。南北長0.5m以上、東西長1.7mある。深さは約0.1mと浅い。北肩は調査区外に広がり、南方は江戸時代から近代にかけての耕作溝で破壊されている。埋土は土坑5と同じく江戸時代の耕作土で埋められている。9世紀から10世紀にかけての土師器、須恵器、瓦などの小片が出土しているが、埋土の状況から、江戸時代の遺構と考える。土坑5と同様の土取穴と考えたいが、掘削深が浅い点が疑問である。

土坑9(図13)南区で検出した。南北長約0.9m、東西長約1.5m、深さ約0.35mある。埋土は、耕作土風の暗灰黄色シルトに遺構面を形成する暗褐色シルトがブロック上に混じるものである。埋土からは、平安時代から中世にかけての土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、瓦などの小片が出土しているが、1点のみ国産磁器の小杯片が出土しており、この遺構が江戸時代のものであることが明らかである。



図13 土坑9・10検出状況(東から)

表1 遺構概要表

時代	遺構	
	北区	南区
平安時代	溝1	溝2
平安時代以降	柱穴6、柱穴7	
安土桃山時代	土坑4-1、土坑4-2	
江戸時代	土坑5、土坑8	土坑9、土坑10、土坑11

土坑10・土坑11（図13）南区で検出した。土坑10は南北長0.75m以上、東西長4.5m以上、深さは約0.5mある。北肩と東方は調査区外に広がり、西肩は攪乱によって破壊されている。埋土は、黄灰色シルト～粘土の止水性の堆積で、滞水状況でゆっくり埋没したものと思われる。上部には江戸時代から近代にかけての耕作土の垂れ込みが見られる。埋土から、土師器、須恵器、黒色土器など平安時代の遺物に加え、焼締陶器、瓦質土器、須恵器插鉢など15世紀後半から16世紀にかけての土器類の小片が出土している。耕作土の垂れ込み状況から見る限り、この遺構も江戸時代に下る可能性がある。なお、東壁際で不定形な落ち込みがあり、平面形が乱れている。壁面の観察からも上位からの掘込みが確認できた。東壁際部分では、土坑10を切り込む小土坑があったようである。しかし、掘り下げ時に認識できなかった。土坑11は平面的な位置関係と埋土の状況から土坑10と一連の遺構の可能性が高い。土坑11からは遺物は出土していない。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

現代攪乱による破壊が著しいこともあり、遺物の出土量は少ない。また、小破片が多く、あまり接合しない。遺物の主体は9世紀から10世紀にかけての土師器、須恵器などの土器類である。11世紀から12世紀にかけての土器類は、溝1と溝2から残存状態の良いものが数点出土している。13世紀から16世紀にかけての土器類は少量のみ出土しているが、実測に耐えるものはない。17世紀から19世紀にかけての土器類も少量が出土しているが、これらも小片である。瓦類は平安時代（9～12世紀）の範囲に収まるとされる小片が一定量出土しているが、軒瓦は無い。石製品としては、滑石製石釜を再加工した温石の完形品が出土している。鉄製品としては、鉄釘が2本出土しているが、時期は不明である。木製品は溝2から少量の木片が出土したが、形状や加工痕が不明瞭なもののみであったため、採取していない。自然遺物としては、溝2から出土した動物骨があるが、小片のため種を同定できない。

(2) 土器類

平安時代前・中期の土師器（図14、図版3）掲載したものは、すべて土坑4-1・4-2から出土したものである。1は碗である。復元口径14.2cm、残存高3.6cmある。灰白色（10YR8/2）を呈する。焼成は良好だが、内外面とも磨耗し、器面調整は不明である。京都I期に比定でき、9世紀前半のものである。2は皿である。復元口径19.5cm、残存高1.6cmある。灰白色（2.5Y8/2）を呈する。焼成は良好である。内面は横方向のナデ調整、外面は磨耗して不明だが外形曲線から判断すると口縁部直下に横方向のナデ調整を施しているようである。京都I期からII期に比定でき、9世紀前半から中頃のものである。3は甕もしくは鍋の口縁部である。復元口径26.8cm、残存高6.5cmある。灰白色（2.5Y8/2）を呈する。焼成は良好である。胎土中に径1mm程度の白色、赤色・黒色の砂粒を多く含む。口縁部内外面は横方向のナデ調整、体部外面は縦方向のハケ調整、体部内面は横方向のナデ調整である。9世紀から10世紀のものである。

平安時代前・中期の須恵器（図15、図版3）掲載したものは、すべて土坑4-1・4-2から出土したものである。4は中央部に宝珠ツマミが付く杯蓋の天井部である。残存高1.8cmある。灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。焼成はやや不良で軟質である。ツマミとその周囲は横方向のナデ調整、その外周もヘラ切り後の横方向の軽いナデ調整を施す。内面中央部は不定方向のナデ調整その外周は横方向のナデ調整である。9世紀代のものである。5は杯蓋である。復元口径13.0cm、残存高1.1cmある。表面は灰色（N5/）、断面は灰褐色（7.5YR5/2）を呈する。焼成は良好である。内外面とも横方向のナデ調整を施す。9世紀代のものである。6は杯蓋である。復元口径13.8cm、残存高1.6cmある。灰色（N6/）を呈する。焼成は良好である。天井部外面はヘラ切り不調整、口縁部内外面と天井部内面は横方向のナデ調整である。9世紀代のものである。7は杯の底部である。復元高台径9.0cm、残存高1.8cmある。表面は灰色（N6/）、断面は褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。焼成は良好である。高台は貼り付けである。器面調整は内外面とも横方向のナデ調整である。9世紀代のものである。8は瓶子の底部である。復元底径3.5cm、残存高2.6cmある。灰色（N6/）を呈する。焼成は良好である。内面には横方向の強いナデの凹凸が螺旋状に残る。体部外面は横方向のナデ調整である。底部外面には回転糸切り痕跡を残す。9世紀代のものである。9は鉢である。復元口

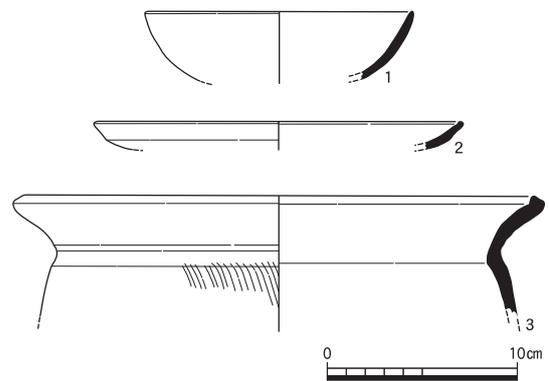


図14 平安時代前・中期の土師器実測図（1：4）

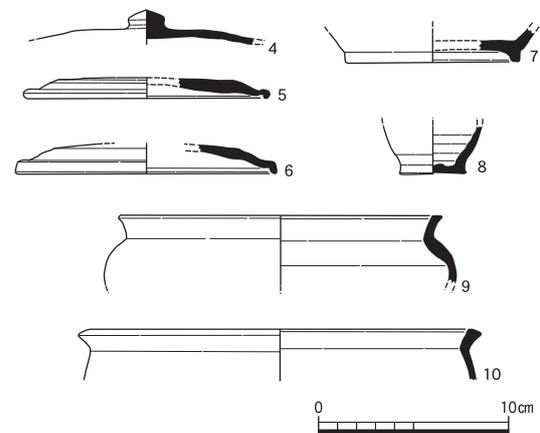


図15 平安時代前・中期の須恵器実測図（1：4）

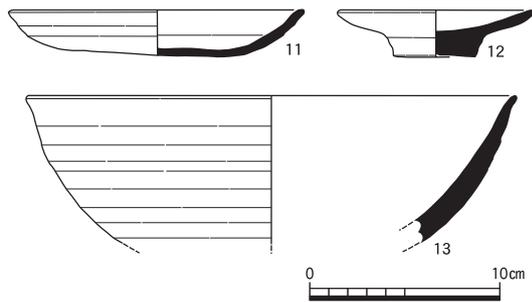


図16 溝1・溝2出土平安時代後期の土器類
実測図(1:4)

径17.1 cm、残存高3.7 cmある。灰白色(5Y7/1)を呈する。焼成はやや不良で軟質である。内外面とも横方向のナデ調整を施す。9世紀から10世紀のものである。10は鉢である。復元口径20.0 cm、残存高2.7 cmある。灰白色(5Y8/1)を呈する。焼成はやや不良で軟質である。磨耗して器面調整を観察できないが、おそらく内外面とも横方向のナデ調整である。9世紀から10

世紀のものである。

溝1・溝2出土土器類(図16、図版3) 11は土師器皿である。溝2の底部近くから出土した。16片に割れているが、接合するとほぼ完形となる。口径15.6 cm、器高2.6 cmある。橙色(5Y7/6)を呈する。焼成は良好である。口縁部内外面は横方向のナデ調整で、外面はいわゆる二段ナデである。底部外面は指頭によるオサエ、底部内面は不定方向のナデ調整である。京都IV期中段階から新段階に比定でき、11世紀後半のものである。12は白色土器系の土師器皿である。復元口径10.4 cm、底径4.4 cm、器高2.5 cmある。灰白色(10YR8/2)を呈する。焼成は良好である。表面が磨耗するが底部外面以外は横方向のナデ調整である。底部外面は回転糸切り痕を残す。京都V期に比定でき、12世紀の前半から中頃にかけてのものである。13は東海地方産の灰釉陶器の鉢である。復元口径25.8 cm、残存高7.9 cmある。灰白色(2.5Y8/1)を呈する。破片の一部に片口部分のような口縁部の歪みがあるが、明瞭ではない。焼成は良好で無釉である。内面は横方向のナデ調整、口縁部から体部上半にかけての外面も横方向のナデ調整である。体部下半から底部にかけての外面は回転ヘラ削り調整である。12世紀代のものである。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、中国製磁器、動物遺体		土師器5点、須恵器7点、灰釉陶器1点		
平安時代 ～鎌倉時代	温石		温石1点		
室町時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、瓦質土器、中国製磁器				
安土桃山時代	施釉陶器				
江戸時代	国産陶磁器				
時期不明	鉄釘				
合計		8箱	14点(1箱)	0箱	7箱

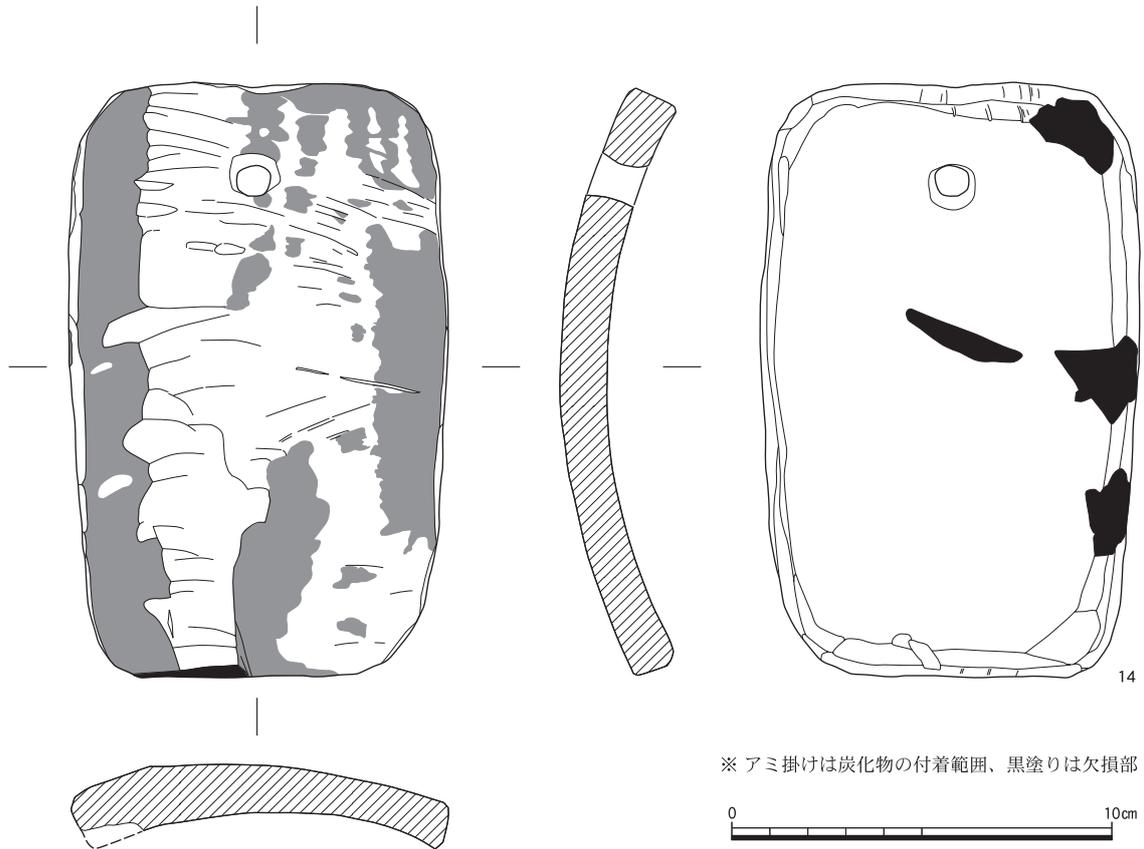


図17 溝1出土温石実測図(1:2)

(2) 温石(図17、図版3)

14は温石である。溝1埋土の上層である灰黄色シルト層と溝1の埋土を覆うオリーブ黒色シルト層の層界付近から出土した。同時に近世の陶磁器類が出土しているので、溝1に伴うものとはいえない。滑石製石釜の破片を再加工したものである。長さ15.6cm、幅9.9cm、厚さ1.1~1.6cmある。石釜の口縁部を側縁として利用し、外形は隅丸長方形に整える。また、鋭利な刃物で鏝部分を削り落として湾曲をもった板状とし、上部に一円孔を穿つ。縁部は丁寧に面取りを施している。表面には石釜として使用されていたときに付着した炭化物が残る。炭化物は口縁部を利用した側縁部にも残っている。母材となった石釜は口縁部付近で内湾する型式であり、12世紀から13世紀頃のもの⁵⁾と考える。したがって、温石として再加工され使用されたのも12世紀から13世紀頃と考える。

5. ま と め

今回の調査では、西坊城小路東側溝（溝1・溝2）を検出することができた。溝内からの出土遺物の最も新しい一群は11世紀から12世紀にかけてのものであるが、近くに他の南北溝がないこと、掘り直した痕跡が見られないこと、埋土の堆積状況から緩やかに埋没していることなどから、平安京造営当初に設けられた道路側溝であると考えられる。

他方、右京七条一坊二町内では確実に平安時代に遡る遺構は検出できず、この場所の景観や存在した施設を知るための手がかりを得ることはできなかった。しかし、平安時代の遺物が後世の遺構埋土中から多数出土していることから、平安時代を通じて、この場所が何らかの機能空間として人々に利用されていたことは明らかであろう。

鎌倉時代から室町時代の遺構も明確なものは検出できなかった。しかし、柱穴6や柱穴7はこの時期の遺構の可能性も考えられ、中世期に居住空間として利用されていた可能性も考えなければならぬ。

16世紀末から17世紀初頭の土取穴と考える土坑4-1と土坑4-2の埋土中に耕作土の混入を認めないこと、17世紀以降の土取穴である土坑5と土坑9の埋土には耕作土が含まれることから、当地が耕地化するのには17世紀以降と考える。しかし、文献資料から、調査地の南方に広がる西鴻臚館の跡地は、15世紀には耕地化していたことが明らかであり、疑問が残る。⁶⁾ こういった問題を論ずるには、なお多くの発掘調査資料の蓄積が必要であろう。

註

- 1) 「大内村」京都市編『史料 京都の歴史』第12巻、平凡社、1981年、504～505頁。
- 2) 平尾政幸・本弥八郎「平安京右京七条一坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1987年、31～34頁。
- 3) 平尾政幸・加納敬二「平安京右京七条一坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1989年、38～40頁。
- 4) 土師器食器形態の時期呼称と年代観は、小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀—』（京都編集工房、2005年）に依拠した。以下も同様である。
- 5) 木戸雅寿「石鍋」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、1995年、511～521頁。
- 6) 「政所賦銘引付 文明十二年十月十七日」京都市編『史料 京都の歴史』第12巻、前掲、508頁。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうしちじょういちぼうにちょうあと							
書名	平安京右京七条一坊二町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2007-6							
編著者名	内田好昭・加納敬二							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 しちじょういちぼうにちょう 七条一坊二町 あと 跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 すじゃくぶんきちょうちない 朱雀分木町地内	26100		34度 59分 32秒	135度 44分 28秒	2007年7月 2日～2007 年8月13日	278m ²	建物建築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 七条一坊二町 跡	都城跡	平安時代	溝	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、中国製磁器、動物遺体				
		平安時代以降 ～室町時代	柱穴	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、瓦質土器、中国製磁器、温石				
		安土桃山時代	土坑	施釉陶器				
		江戸時代	土坑	中国製磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-6
平安京右京七条一坊二町跡

発行日 2007年10月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961